

官民共同による地域の文化活動活性化の取り組み： 韓国・弘大地域芸賛道での音楽活動を中心に

大和, 裕美子
九州大学大学院比較社会文化学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/26552>

出版情報：地域健康文化学論輯. 6, pp.1-22, 2012-03-31. 地域健康文化学会
バージョン：
権利関係：

官民共同による地域の文化活動活性化の取り組み

—韓国・弘大地域芸贅道での音楽活動を中心に—

大和 裕美子

1. はじめに

本稿の目的は、官民の共同作業によって、地域の文化活動を活性化しようとする取り組みを分析し、その背景と過程を明らかにしながら、この取り組みが抱える問題の所在を示すことである。事例は、韓国ソウル特別市麻浦区の弘大地域にある芸贅道(예찬길イェチャンギル)で、2012年10月より開始されたソウル特別市マウル共同体総合支援センターで推進されている「ウリマウルプロジェクト」¹の支援のもと、実施されている音楽活動である。

弘大地域は以前から、芸術の町・音楽の町としての特性を持っている地域である。だが近年、音楽活動に陰りが見え始めている。ライブクラブの数は減少し、雑貨屋、洋服店、飲食店などを経営する店舗が目立ち始めた。この状況に対して、弘大が位置する麻浦区は、音楽のまちとしての特色を活かすことを望み、合法的にストリートライブの公演を行える遊歩道の建設などに取り組んできた²。しかしながら、ライブクラブの経営を直接的に支援することは難しく、現在もライブクラブの数は減少し、今あるライブクラブでの公演数も少なくなっているのが現状である³。

韓国では弘大地域が特性を有する場所であることから、この地域を対象に数多くの研究がなされてきた。その中でも本稿の問題関心ともっとも近いのが、弘大地域のライブクラブを中心に地域の文化生産活動と拡散過程を分析したイ・ソグの研究である⁴。この研究は、弘大のライブクラブ文化が形成された要因と、ライブクラブを中心に行われている音楽生産活動のメカニズムを分析することを目的に論じられている。結論部分でイは、「音楽生産において才能ある人的資源は引き出されているものの、資本の誘致は活発になされておらず、その点が音楽生産の成長の制約要因として作用している」⁵と主張している。そのため

¹ ウリマウル(우리마을)のウリは「私たち」、マウルは「町」や「村」を意味する。この「マウル」という用語が、日本でも「町」や「村」などに訳されることなく使用されている例が多いことに鑑み(たとえば「セマウル運動」や以下で取り上げる「ソンミサン・マウルなど)、本稿でも「マウル」と表記する。

² 麻浦区庁文化体育課職員へのインタビュー、2012年12月6日。

³ 「朝鮮日報 chosun.com」2012年6月20日、http://news.chosun.com/site/data/html_dir/2012/06/20/2012062000093.html、2012年12月、最終アクセス。

⁴ イ・ソグ「地域の文化生産活動と拡散過程に関する研究—弘大前のライブクラブを中心に」ソウル大学校都市計画学修士学位論文、2003年2月(이석우 ‘지역의 문화생산활동과 확산과정에 관한 연구’— ‘홍대앞’ 라이브 클럽을 중심으로— 서울대학교 환경대학원 환경계획학과 도시계획학 석사학위논문, 2003년 2월)。

⁵ 同上、韓文抄録、2頁。

に「ライブクラブの自律的な運営に関わる法的な制度の整備が先行されなければならないのであり」⁶、また「このような支援政策はライブクラブが単にコンサート観覧のための小規模なものにとどまるのではなく、複合音楽空間として活用されなければならない」⁷と結論づけている。

この論文が発表されたのは2003年であるが、この年以降もライブクラブの数は減少をたどり、直接的な行政による支援も困難であるという点において、現在もなお問題を抱えている。

本稿ではこの問題の克服可能性を秘めている事例として、弘大地域芸賛道の「ふと出会った楽器店」(어쩌다 마주친 악기사)で展開されている音楽活動を分析する。ここで行われている音楽活動は、イ・ソグの言う「複合音楽空間」として捉えることができるものである。すなわち、「ふと出会った楽器店」は店名こそ「楽器店」であるが、内容は楽器の販売にとどまるものではない。楽器講座が開講され、比較的広い敷地を利用し毎週金曜日には、インディーズバンドなどによる無料コンサート「ふと出会ったコンサート」も行われている。地域住民を対象としたアコースティックギター・ウクレレ・ドラム講座は、ソウル市の「ウリマウルプロジェクト」の支援を受けながら実施されている。これも単なる楽器講座にとどまるものではなく、上級コースのカリキュラム修了時には、毎週金曜日に行われているコンサートの舞台に上がり、演奏を披露する場が設けられている。さらには現在上級コース修了者と講師が共同で曲を作成し、韓国の音楽サイトの「メロン」(会員制、著作権が保護される)⁸での発表も計画中であると言う⁹。このように「ふと出会った楽器店」に見られる楽器販売から講座、コンサートまでをトータルに提供する「複合音楽空間」は、従来見られなかった新しい音楽活動形態である¹⁰。

「ふと出会った楽器店」でのアコースティックギター・ウクレレ・ドラム講座が、ソウル市の「ウリマウルプロジェクト」の支援対象に選定された理由は、これがライブクラブでもなく楽器店でもなく、楽器教室でもない「複合音楽空間」という形態であるからであろう。「ふと出会った楽器店」を含む「芸賛道」での「マウル学校」が優秀マウル共同体に認定され、現在他の自治体の注目も集めている¹¹。

そしてこの事例が克服した点は、直接的な行政支援を得たことにとどまるものではない。楽器店で、すなわちワークスペースで直接講義が行われることによって、授業資材や器具を備えるのにコストを要していた自治会館講義の限界をも克服している事例として注目されている¹²。ところでこの事業に問題点はないのだろうか。例えば、ミュージシャンの経済問題はつねに課題であるが、それを解決する可能性は秘められているのだろうか。

⁶ 同上、121頁。

⁷ 同上、121頁。

⁸ メロン(Melon)、http://www.melon.com/static/cds/main/web/main_list.html、2012年12月最終アクセス。

⁹ 「ふと出会った楽器店」C氏へのインタビュー、2012年12月22日実施。

¹⁰ 「ふと出会った楽器店」A氏へのインタビュー、2012年12月17日、およびB氏へのインタビュー、2012年12月21日実施。

¹¹ 「私たちのまち麻浦」(<내고장 마포>)9月号、麻浦区庁、2012年8月27日、10頁。

¹² 「麻浦トゥデイ」(<마포투데이>)

2012年10月11日、http://mbs.mapo.go.kr/vod/vod_sub.asp?gubun=010101&vIdx=2491、2012年12月最終アクセス。

本稿の構成は以下のとおりである。まず韓国において、「弘大」がどのような地域であるかを説明する。韓国内で弘大地域は、社会学、メディア、都市計画、建築などさまざまな学問領域で分析対象とされている。だが、それに比して日本で発表された論文は乏しい。学界だけではなく、一部の人を除けば、日本における弘大の認知度は一般的に決して高くはないのが現状であろう。近年、日本からソウルへの観光客も増加し、以前と比較すれば韓国の地域に対する認知度も格段に高まっていることは、改めて言及するまでもない。だが、日本人観光客のソウル地域での訪問地は、その多くが明堂（66.7%、2010年）、東大門市場（56.4%、同年）、南大門市場（45.5%、同年）に偏っている¹³。弘大は、日本語で紹介された観光ガイドブックやインターネットサイトでも取り上げられているものの、幅広く知られている地域であるとまでは言い難い。

つぎに「ふと出会った楽器店」がオープンされた2012年5月から、現在に至るまでの過程を追い、ソウル特別市マウル共同体総合支援センターによる「ウリマウルプロジェクト」の一環として弘大地域の芸賛道で実施された「マウル学校」を「ふと出会った楽器店」での楽器講座を中心にその音楽活動の概要と過程、成果を明らかにしながら、この事業が抱える問題点を浮き彫りにする。

2. 弘大地域について

(1) 弘大地域とは

以下では先行研究に依拠しながら、韓国における弘大地域の特徴を述べる。弘大地域に関する諸研究は、弘大地域が持つ文化・美術的性格にもとづく固有文化の保存を論じたり、地域の特性を明らかにし、それを今後どのように活性化させ得るのかといった方案を提示したりするものが主流をなしている¹⁴。

場所マーケティング戦略分析を導入しながら、地域文化追求型の場所マーケティング戦略を文化政治的な観点から評価し、弘大地域クラブ文化の事例分析を通して方法論を導出したイ・ムヨンは、つぎのように弘大地域を説明する。

まず、弘大地域は韓国の代表的なクラブ文化地域であり、国内唯一のアンダーグラウンドクラブ文化が生み出される場所として、ライブクラブ（2005年12月現在22カ所）とダンスクラブ（2005年12月現在30ヶ所）が密集している代表的なクラブ文化の集積地域

¹³ ソウル市庁開発研究員長、仁川開発研究員長、京畿開発研究員長

『首都圏広域経済発展委員会委員長貴下提出文』2012年2月、128頁（서울시장개발연구원장, 인천발전연구원장, 경기개발연구원장<<수도권광역경제발전위원회 위원장 귀하제출문>>, 2012년 2월）.

¹⁴ シン・ジョンラン「弘大地域の場所性形成における人的要因の影響に関する研究—弘大地域の若者訪問客を対象に」漢陽大学校修士学位論文、2010年8月、13頁

（신정란 <홍대지역의 장소성 형성에 있어서 인적요인의 영향에 관한 연구—홍대지역의 젊은 방문객을 대상으로—>한양대학교 석사학위논문, 2010년 8월）.

である。弘大地域のクラブが全国に占める割合は、ライブクラブが 41.0%、ダンスクラブが 63.6%であり、ソウル全体に占める割合は 60.0%、ダンスクラブが 72.4%である。

第二に弘大地域は、音楽だけでなく美術、演劇、映画、ダンスなど、様々な文化芸術活動やデザイン、漫画、出版、広告、ファッション、インターネットコンテンツなど最先端のマルチメディア関連文化専門業種が密集するソウルの代表的な複合文化地域である。2004年12月現在、画房と表具20か所、美術学院102か所、スタジオ219か所、小劇場やギャラリーが21か所、レコード店7店舗、工芸品46社、出版社92社が弘大地域に分布している¹⁵。

弘大地域の利用者に、弘大地域を魅力的と考える理由を尋ねた調査結果を見ると、クラブの役割が大きく作用していることがうかがえる。弘大地域の最大の魅力として韓国人は自由、新しく多様な文化と空間の存在、個性、共感できる人々、余裕のある雰囲気、様々な音楽などを挙げている。一方同様の質問に対し外国人は、ナイトライフ、自由、開かれている雰囲気、エレクトロニックダンスミュージックを挙げている。

週末のナイトライフを楽しむために弘大地域を訪れる外国人は多い。内訳はクラブが最も多く、その次がバー、レストランの順である。これらの結果は、弘大地域のクラブのイメージに対する認識調査と類似した傾向を示している。すなわちクラブと言えば浮び上がるイメージがどのようなものかという質問に対し、自由、喜び、様々な人々、音楽、ダンス、文化、雰囲気、粋、芸術、ファッション、弘大など弘大地域のイメージと同じような答えがほぼ80%を占めている¹⁶。

このような弘大地域の空間的範囲を行政的に見れば、ソウル市麻浦区西橋洞(326番地から411番地一帯)、倉前洞(5番地、6番地、436番地一帯)、上水洞(64番地から319番地一帯)、東橋洞(162番地から189番地一帯)を包括し、面積は1,372,123㎡である。しばしば弘大地域は「弘大前」と呼ばれる。しかし弘大前という名称は一般的に弘益大正門から地下鉄2号線がある大通りまで200m余りの車道を中心に、その左右に広がる地域一帯を称するもので、行政的に見ると弘益大が位置する麻浦区上水洞と西橋洞一部を称する制限的な概念である¹⁷。

本稿で扱う「ふと出会った楽器店」は倉前洞2番地に位置する。そのため、ここは厳密に言えば「弘大地域」ではないことになるかもしれない。しかし「ふと出会った楽器店」A氏が、店が位置する場所を弘大と述べていることや¹⁸、麻浦区西江洞も芸賛道の位置を「弘大前芸賛道」と説明していること¹⁹などを鑑み、本稿でも芸賛道が位置する場所の名称を弘大とし、論を進めていきたい。

¹⁵ イ・ムヨン『地域発展の新しいパラダイム 場所マーケティング戦略—弘大地域クラブ文化場所マーケティングの文化政治』ノンヒョン、2006年、158頁(이무용<<지역발전의 새로운 패러다임, 장소마케팅 전략>>논현,2006년)。

¹⁶ 同上、158頁。

¹⁷ 同上、149頁。

¹⁸ 「ふと出会った楽器店」A氏へのインタビュー、2012年12月17日。

¹⁹ 「会議資料 芸賛道」

(회의자료 예찬길) 2012年7月19日会議実施、西江洞提供資料。



写真1 弘大地域地図（麻浦区観光案内地図より筆者作成）²⁰

（2）1990年代の弘大地域——ライブクラブの出現

1980年代以前まで弘大地域一帯は、延世大学が位置する新村と梨花女子大学のある梨大前など、隣接地域の名声に隠れて、社会的にも文化的にもあまり注目を集める場所ではなかった。1982年に弘益大学に入学し1986年に卒業した人物も「今のようにカフェが軒を並べているわけではなく、美術のまちとして有名でもあるわけでもなかった。むしろ延世大学のある新村や梨花女子大学のある梨大前のほうがカフェや居酒屋が立ち並び、若者の町として活気を帯びていた」と語る²¹。

弘大地域に現在のような大規模な美術学院通りが生まれ始めたのは、1986年ごろからである。弘大地域にスタジオが集まり始めたのは、弘大美術学部の存在が大きな役割をしたものの、1980年代後半、108スタジオ（保証金100万ウォンに家賃8万ウォン）、208アトリエ（200万ウォンに8万ウォン）という言葉が流行したことに象徴されるように、この一帯の使用料が低かったことも大きく作用した²²。

しかしながら近年使用料が高騰し、作家が弘大地域を離れたり、周辺地域に移動したりする傾向が生じている。地価の上昇とともに、既存の戸建住宅が商店街やワンルームマンションに姿を変えながら、作業室として使われたガレージや地下室のような空間も徐々に消

²⁰ 「より住みよい福祉麻浦」麻浦区、2013年、
<http://www.mapo.go.kr/CmsWeb/resource/document/mapo/mapointro/mapo2013plan.pdf>
 2013年2月最終アクセス。芸賛道は右上方の点線上に位置する。

²¹ D氏（ソウル市在住、男性、40代）へのインタビュー、2012年12月9日。

²² 前掲、『地域発展の新しいパラダイム 場所マーケティング戦略』152頁。

える傾向にある²³。行政側（麻浦区庁）でも、弘大地域でライブクラブが減少している要因は、第一にこの地域の地価の高騰にあると捉えている。先に述べたように、合法的にストリートライブを行うことのできる遊歩道を建設した理由はここにある²⁴。

弘大地域が社会的に注目を集め始めたのは、1990年代初頭にポストモダン様式の高級カフェが登場してからである。弘大正門から極東放送局、駐車場の路地に至る沿道を中心に、いわゆる「ピカソ通り」とカフェ路地が形成された時期である。美術学生や作家、文化芸術家が出入りしていた通りに、エレガントで古風な高級カフェとテーマカフェ、複合ギャラリーが登場し、弘大地域は静かで高級で自由な地域イメージを形成するようになった²⁵。

1990年代半ば以降、アンダーグラウンドクラブ文化が弘大地域において、場所性の形成に重要な役割を担い始め、この時からライブクラブとダンスクラブが登場してきた。弘大地域にライブクラブが建設されるようになったのは、歴史的に大学街のメッカとも言える新村地域との地理的近接性が大きく作用したといえる。元来、若年層が多く集まる韓国の代表的な大学街である新村一帯に、1970年代以降、主にギターフォーク音楽を中心としたライブカフェが自然に形成され、1980年代にはロックカフェを中心に、ロック音楽が演奏された²⁶。

ところが1990年代以降、新村は退廃的な空間としてマスコミに報道され、取り締まられた結果、ロックカフェは撤退することとなった。カフェでのライブ公演が違法化されると同時に、10代を対象とした画一的なダンス音楽が大衆音楽界を支配するようになり、ロック音楽演奏者たちの活動の舞台が徐々に新村で消えていった。そのような中、1994年に弘大地域に「ドラッグ」というライブハウスが初めて登場し、ライブクラブは音楽に対する情熱を持ち、様々な自分の好みの音楽活動をしたいロックバンドにとって、彼らなりの夢を広げることができる唯一の空間となった²⁷。

これ以降「ドラッグ」を筆頭に、ライブクラブが弘大地域に立ち入ることができるようになったのは、ここが新村と隣接する大学街のメッカとして、新村より地価が相対的に安価で、用途転換が容易な住宅街が相対的に多い準住居地域であるために、賃貸が容易という経済的な要因によるものであった。また、弘大美術学部の存在と自由なマインドの若い芸術家たちと学生層の存在により、独特の地域の雰囲気形成していた地域文化的要因も同時に作用した。このように、大衆音楽の主流秩序によって提供される商業的で画一化された音楽文化から脱け出して、多様な感性と欲望の音楽空間創出のための課題と選択肢が試みられた場所が、まさに弘大地域ライブクラブだった²⁸。

（3）1990年代後半の弘大地域——ダンスクラブの出現

²³ 同上、152頁。

²⁴ 前掲、麻浦区庁文化体育課職員へのインタビュー、2012年12月6日。

²⁵ 前掲、『地域発展の新しいパラダイム 場所マーケティング戦略—弘大地域クラブ文化場所マーケティングの文化政治』156頁。

²⁶ 同上、155-156頁。

²⁷ 同上、156頁。

²⁸ 同上、156頁。

1990年代後半に入ると、ライブクラブとともに、弘大地域クラブ文化の形成の牽引の役割を担っているダンスクラブが、地域の新たな空間文化現象として台頭し始めた。弘大地域のダンスクラブは、海外の類似のクラブや韓国の江南、梨泰院など地域のクラブとは根本的に異なる性格を持つ。つまり弘大地域のダンスクラブは、外国のクラブの形をそのまま移植した形ではなく、弘大美術学部が位置していることが大きく作用し、地域にすでに存在していた作家たちの作業室がクラブ形成の母胎となった。スタジオの作業過程において音楽は必需品であり、ここにダンスと飲み物が加わり、ダンスクラブ文化の萌芽を形成したのである。したがって、弘大地域のクラブ文化は、弘大地域の場所性を反映すると同時に、再びその場所性を強化する多分に弘大地域的な性格を持っている²⁹。

近年、弘大地域は大学路や新村にあるようなカフェやバー、レストランが入り、大規模な商業圏へと変貌している³⁰。弘大地域のライブクラブ数は減少しているが、この地域自体が衰退しているわけではない。ただこのような状況に対して行政側は、弘大に隣接する新村や梨大前との差別化を図るためにも、弘大地域の芸術、音楽の町としての特色を発展させていくことを望んでいるようである³¹。

3. 複合的音楽活動の形成過程と概要、問題点

(1) 「芸賛道」の形成

「ふと出会った楽器店」は、2012年5月16日にオープンした。経営者A氏は20代半ばの男性で、インディーズバンドのドラムを担当している。以前は同じく弘大地域にあるライブクラブで働いていた。A氏のインディーズバンドでボーカルを担当していたB氏をスタッフに加え、二人でこの楽器店を始めた。

この店には「勤務信条」として掲げられている5つの「決意」がある。そこには「私たちは地域社会（近隣住民）に奉仕することで、楽しいまちづくりの先頭に立ちます」そして「私たちは純利益の10%を無条件に寄付します」と記されており、行政へ寄付金を送っている。開店当初から、楽器を販売するだけでなく、コンサートを実施したり、サークル形式で演奏の指導を行ったりする方針が想定されていた。サークル形式とは、楽器店スタッフの話によれば、一般的な音楽教室とは異なり、ひと月あたり1万ウォン（一般的な音楽教室の場合、個人レッスンもしくは2～3人の少人数レッスンであることが多く、ひと月あたり10万ウォンの授業料が相場）の金額を受け取って、自分たちの「才能を寄付する」という考えのもと、楽器を学ぶ手伝いをするというものである³²。この当初サークル形式で考えられていた「才能寄付」は、西江洞の支援を受け「芸賛道マウル学校」として実現化されることとなった。

²⁹ 同上、156-157頁。

³⁰ 同上、157頁。

³¹ 前掲、麻浦区庁文化体育課職員へのインタビュー、2012年12月6日。

³² 「ふと出会った楽器店」B氏へのインタビュー、2012年12月24日。

ここで「芸賛道」とこの通りが形成された過程について触れておきたい。「芸賛道」(예술을 찬양하는 사람들의 길, 「芸術を賛美する人たちの通り」という意味)は、ここを訪れるすべての住民と芸術的才能を共有し、表現することができる機会を開くためのマウル共同体である³³と定義される。

形成過程は以下のとおりである。まず2012年3月7日に、地域支援の調査および地域住民の個別面談が行われた。翌月4月からは、マウル活動家の公募が行われ、同月24日に芸賛道のマウル活動家の会が催された。マウル活動の運営および活性化方案の模索について話し合わせ、このマウルの通りを「芸賛道」とすることなどが決定された。翌月5月に「芸賛道」第1回懇談会が開催され、通りでの音楽、美術、工芸などにおいて、才能ある芸術家が多い点を活用し、自治会館と連携して、多彩なフィールド・プログラムを開発することが確認された。翌月6月からは、「ふと出会った楽器店」でドラム・ギター講座が、7月からはコーヒー店「ゴールドテンパープロジェクト」でバリスタ講座が開設された。また「訪れたくなる「芸賛道」づくりのための環境整備」を議題に、環境整備の推進についても検討された。2012年5月12日に、散水車での通りの清掃、同月29日には不法投棄根絶および保安のための保安灯設置などが話し合われた。

2012年7月20日には、「芸賛道」第2回懇談会が開催された。個別の作業空間から抜け出し、「芸賛道」内の地域住民すべてが参与することのできる地域祭りを開催するために、「ふと出会った楽器店」経営者を代表に、マウルの会「芸賛道」コミュニティ(20余名で構成)が結成された。環境整備について、7月23日に犯罪予防のための犯罪用無人カメラの設置要請、同月27日には「芸賛道」コミュニティで自律的に清掃することが議論された。

同年9月5日、ソウル特別市マウル共同体総合支援センター「ウリマウルプロジェクト」事業に申請、同月18日「ウリマウルプロジェクト」の支援事業として選定され、支援金437万5千ウォンを受けることが決定し、同年10月に「ウリマウルプロジェクト」の支援を受けた「芸賛道マウル学校」が開校され、西江洞から受けていた財政的な支援はソウル市から受けることとなった。支援期間は同年10月から12月までの3か月間で、事業目的として「西江洞芸賛道マウル学校を通して、住民間のコミュニケーションを活性化し、分かち合いと学びを实践することができるマウル共同体構築」³⁴が掲げられた。

2013年1月現在、マウル活動家の親睦会「一緒に昼食を食べる日」(週に1回実施)、「芸賛道」マウル活動家環境整備(月に1回実施。通りの清掃、改善)「芸賛道」コミュニティ定例会議(月に1回実施。「芸賛道」に対する情報共有および発展方案を討論、「ウリマウルプロジェクト」支援金執行結果の報告と清算、マウル学校受講料収益10%分配寄付に対する議論、マウル学校公募方案など、その他「芸賛道」発展に対する案件を議論)が実施されている。

³³ 「会議資料 芸賛道」

(회의자료 예찬길) 2013年1月9日会議実施、西江洞提供資料。

³⁴ 「ウリマウルプロジェクト 最終結果報告書 芸賛道コミュニティ」

(우리마울프로젝트 최종결과보고서 예찬길 커뮤니티)、西江洞提供資料。

区分	ふと出会った楽器店	ビンテージレコード	Cafe 森へ行く魚	イモラブ	ゴールデンテンパープロジェクト
対象	すべての地域住民				
講座内容	アコースティックギター教室、ドラム教室、ウクレレ教室	ネックレス、指輪など手工芸アクセサリーづくり	手縫いのテーブルクロス、カップホルダーづくりなど	シルクスクリーン、カラージュなどポップアートとペインティング講座	コーヒーに対するすべてのことを学ぶ講座
分類	楽器講座	手工芸		美術	バリスタ
講師	ふとブラザーズ所属楽器講師	ホン・スンヨンデザイナー	イム・フェソン講師	イモラブ所属講師	タク・ヒョンホバリスタ
期間	2012.6月～	2012.10月～			2012.7月～
受講人数	ギター40名(1班20名)、 ドラム10名、 ウクレレ10名	6名	6名	10名	24名(1班12名)
備考	受講料収益金10%分配寄付(10～12月間504,000ウォン)				

表1 「芸賛道」マウル学校運営(西江洞資料より筆者作成)³⁵

³⁵ 同上。



写真2 「芸賛道マウル学校」2012年11月～12月講座案内リーフレット（2012年12月、「ふと出会った楽器店」提供）

(2) 「マウル共同体」について

2012年9月に「芸賛道マウル学校」は、ソウル特別市マウル共同体事業の「ウリマウルプロジェクト」に選定され、ここから支援をうけることとなった。以下では「マウル共同体」(마을공동체)について概観したのち、「芸賛道マウル学校」の財政的な側面を分析したい。

「ウリマウル事業」は、パク・ウォンスン(朴元淳、박원순)のソウル市長就任後に開始された施策であり、パク市長が重要施策として公約で掲げた「パク・ウォンスンブランド事業」である。「ウリマウル事業」は、数十年間草の根で活動していた活動家の努力が日の目を見た点、また都市化の象徴であるソウルで、このような新鮮な政策が実施される点において、肯定的な反応を得た。だがその一方で、明確な成果が求められる官において、一瞥しただけでは確認することが困難な活動をいかにして評価するかが懸念される中で開始された³⁶。

パク市長は1970年代に朴正熙政権下で推進されたセマウル運動と比較しながら、「ウリマウル事業」はソフトウェア中心の概念であると説明する。セマウル運動は、藁葺き屋根をスレート屋根に変えたり、川に飛び石のかわりに橋を架けたりといったハードウェアの整備を実施することで経済的な観点からよりよい暮らしを追求するものであったのに対し、

36 「ポリニュース」(폴리뉴스) 2013年1月7日、
<http://www.polinews.co.kr/news/articleView.html?idxno=165956>、2013年1月最終アクセス。

「ウリマウル事業」は人びととの関係を復元し、お互いが配慮し合う社会を目指すものである。あまりにも忙しく熾烈な生存競争の中で、心の安らぎと平和、人びととの関係を通して幸せを感じる時代をもう一度つくってみようとするもので、要するにGDPなど国民の所得水準が指標となる経済発展重視の時代を超えて、今の生活の質、福祉、幸福などを中心に据える「人中心」の社会を目指すものと述べる³⁷。

この時期に行政側が打ち出した「住民主導型のマウル共同体モデル」という方針とそれにもとづく支援展開は、韓国都市共同体運動の流れの中に位置づけられよう。韓国都市共同体運動の展開過程と協力型モデルの意味を考察し、「協力型」都市共同体運動の代表的な事例として、京畿道安山市と水原市のマウル共同体の構築経験の分析を行っているジョン・キュホは、以下のように韓国都市共同体運動の流れを時代別に類型化する。

まず1960年代および1970年代には、都市民の貧困解決と自活と自立を支援するための「適応型」都市共同体運動が登場した。1980年代には、都市再開発と強制撤去から住宅生存権を守ろうとする「抵抗型」都市共同体運動が見られ、1990年代には、生活の質と参加に対する市民の関心の高さをもとに生活世界を守るための「防御型」都市共同体運動が登場した。そうして1990年代後半には、都市民の定住意識と経済的自立を高めるための「創造型」都市共同体運動が起こった。これ以降、生活者の目線で現場と日常に、より深く根を下ろすための新しい都市共同体運動の模索が続いており、2000年代後半には、民と官がお互いに協力して都市の空間と経済、社会の領域を総合的に再構成するための「協力型」都市共同体運動が登場してくることとなった³⁸。

すなわち、「芸賛道マウル学校」やソウル特別市マウル共同体総合支援センターの「ウリマウルプロジェクト」のような事業が実行される背景には、2000年代後半に登場した民と官の協力による、つまり「協力型」都市共同体運動の登場の流れが存在していると言える。

ソウル市のマウル共同体の中で最も有名な事例がソンミサン・マウルである³⁹。ソンミサン・マウルは「芸賛道」が位置する麻浦区にある。パク・ウォンスンソウル市長が村共同体事業の例として挙げ、注目された。ソンミサン・マウルは1994年に若い父母が、共同育児のために保育園をつくったのを皮切りに、麻浦区城山、望遠、西橋、合井、延南洞一帯に生協、共同住宅、劇場などを建設しながら、形成された共同体である⁴⁰。保育園は国公立

³⁷ 「ポリニュース」(폴리뉴스) 2012年7月9日、
<http://www.polinews.co.kr/news/articleView.html?idxno=152246>、2012年12月最終アクセス。

³⁸ ジョン・キュホ「韓国都市共同体運動の展開過程と協力型モデルの意味」『精神文化研究』35巻2号、2012年、7-34頁(정규호 <한국 도시공동체운동의 전개과정과 협력형 모델의 의미><<정신문화연구>>Vol.35 No.2, 2012年)。

³⁹ ソンミサン・マウルの事例は日本においても注目されている。ソンミサン・マウルについて邦文で紹介された文献に、秋葉武「地域づくりに参加する韓国の生協--「ソンミサン・マウル」における協同組合民主主義の継承(特集 協同の広がりですすめる元気な地域づくり)」『にじ』(632)協同組合経営研究所、2010年やエンパブリック・日本希望製作所『まちの起業がどんどん生まれるコミュニティ——ソンミサン・マウルの実践に学ぶ』(NPO法人日本希望製作所、2011年)など。

⁴⁰ 「連合ニュース」(연합뉴스) 2012年12月30日、
<http://news.naver.com/main/read.nhn?mode=LSD&mid=sec&sid1=102&oid=001&aid=0006013504>、2012年12月最終アクセス。

保育施設と私立保育園に分けられるが、ソンミサン・マウルの保育園は「協同組合」が主体となって設立された。財政、運営、清掃、食事など運営全般は、保護者で構成される理事会によって担われる。出勤時間帯に子供を預け、退勤時間に迎えに行くことができる共同育児保育園は、共働きの夫婦の生活パターンに適合したものであった。すなわちソンミサン・マウルの保育園は、住民自らの「必要」を基に出発した⁴¹。ソンミサン・マウルの教育・育児インフラに対する住民の満足度は高く、2012年8月に村の住民375人を対象にアンケートを行った結果、回答者全体の66%である235人が同マウルに移住した最初の理由として「教育・育児」を挙げている⁴²。

「ウリマウルプロジェクト」の支援事業の趣旨と目的は、「住民の自発的な参加と必要に応じたマウル共同体の形成を支援し、住民主導型のマウル共同体モデルを発掘するために支援する事業」であり、2つの細部事業に区分されている。一つは「住民の集まりを支援する事業で、マウル共同体の形成のために努力する住民が初の住民集會を構成して運営できるように支援する事業」である。もう一つは、「マウル計画支援事業で、マウルの住民の間に主体が一部形成され、マウルの計画を樹立しようとする住民を支援する事業」である⁴³。

初年度にあたる2012年の予算は、2億ウォンが生まれ、前者の「住民の集まり形成支援事業」は総予算8000万ウォン規模で、支援事業ごとに最大150万ウォンが支援され、人件費、固定人件費、事業費、活動費、コンサルティング費等が支援されることとなった。

支援対象は、マウル共同体の形成を準備している住民の集まりや団体の小規模自発的団体であり、住民の集まりの場合、3人以上の団体が対象となる。ここでいう「住民の集まり」とは、「法人または非営利民間団体に登録された団体ではない集まり」を指す。マウル共同体を志向する住民の集まりや団体であれば、新規、既存を問わずに申請が可能であり、例として、「「アパート主婦その他の会」で行うマンションの住民を対象にしたコンサートなど」が挙げられる⁴⁴。

まず住民が企画、申請したのち、受付、調査、そして審査後、通過すれば支援、そして精算と報告書の提出、最後に評価という手順を踏む。審査項目は、事業の妥当性や妥当性、推進主体の意志と力量、創造性、事業計画の方向性、住民参加の程度、予算運営の適正性かどうか、期待効果、自己負担能力などが設けられた⁴⁵。

楽器店開店当初の「才能寄付」という考えにもとづく音楽サークルという構想は、西江洞住民自治委員会の「芸賛道」講座として行われるようになり、さらにはソウル特別市マウル共同体総合支援センターで推進されている「ウリマウルプロジェクト」の支援のもとで実施されるに至った。すなわち、行政側の「住民の自発的な参加と必要に応じたマウル共同体の形成を支援し、住民主導型のマウル共同体モデルを発掘するために支援する事業」というコンセプトと、「ふと出会った楽器店」の楽器販売にとどまらない演奏指導、無料コ

41 「ポリニュース」(폴리뉴스) 2012年12月18日、
<http://www.polinews.co.kr/news/articleView.html?idxno=164570>、2012年12月最終アクセス。

42 同上。

43 ソウル市マウル共同体総合支援センター、ホームページ <http://www.seoulmaeul.org/>、2012年12月最終アクセス。

44 同上。

45 同上。

ンサートという従来見られなかった複合的な音楽活動が合致したわけである。「ウリマウルプロジェクト」からの支援が開始された2012年10月以降は、同プロジェクトから財政的な支援がなされ、西江洞は広報や講座受付などを行っている⁴⁶。



写真3 芸賛道 2012年12月23日、筆者撮影

⁴⁶ 麻浦区西江洞「芸賛道」担当職員へのインタビュー、2012年2月19日。



写真4 「ふと出会った楽器店」2012年12月23日、筆者撮影

(3) 「芸賛道マウル学校」における「ふと出会った楽器店」の複合的音楽活動

「芸賛道マウル学校」7講座のうち、「ふと出会った楽器店」は、アコースティックギター・ウクレレ・ドラム講座の3講座を担当している。西江洞役所の「芸賛道」担当職員によれば、「芸賛道マウル学校」において「ふと出会った楽器店」の比重は高い。この担当職員もインタビューの中でしばしば「芸賛道」を「音楽通り」と呼ぶ⁴⁷。「芸賛道」コミュニティの代表者は、「ふと出会った楽器店」のオーナーであり、先述したように「芸賛道」での最初の講座は「ふと出会った楽器店」で開講された。すなわち「ふと出会った楽器店」は「芸賛道」の代表的存在である。

「ふと出会った楽器店」開店当初は、A氏とB氏の2人だけであったが、「芸賛道マウル学校」の講師として新たに2名加わった。講座は昼の時間（11時から12時までと13時から14時まで）と夜の時間（19時から20時まで）に分かれ、そのうちの1コマを選択する。1クラスに約10名で、授業時間は1時間である。2012年6月の開講当時の生徒数は約60名で、アコースティックギターが約40名、ウクレレ約10名、ドラム約10名であったが、2012年冬以降にはアコースティックギターが約70名、ウクレレ約20名、ドラム約10名で、合計100名まで増大した。レベルは初級・中級・上級の3コースに分かれ、続けて登録することができる。課程の締め括りとして、毎週金曜日のコンサ

⁴⁷ 同上。

ートの場で演奏する。冒頭で触れたように、上級クラスは講師が作成した曲を演奏、録音する準備を進めている。男女比に偏りはなく、年齢層も小学生から50代までと幅広い⁴⁸。



写真5 「芸賛道マウル学校」講座（2012年11月12日撮影、「ふと出会った楽器店」提供）

「芸賛道マウル学校」講座の魅力のひとつは、安価に設定されている料金である。最初は子供だけが通うつもりであったが、料金が安いと一緒に通うことになった母親もいる。また料金だけではなく、この講座がレッスン形式ではなく、サークル形式をとっているために通っている人たちもいる。つまり、元々知り合いである数名の仲間が集って、1グループを形成し、同時に教えてもらえるスタイルも可能である。そのため、ある企業内で楽器を習いたい社員が集まってアコースティックギターを学んでいるグループもある。そのグループは、講座の最終週にあたる12月末の金曜日の「ふと出会ったコンサート」の舞台上、演奏を披露した。

⁴⁸ 「ふと出会った楽器店」C氏へのインタビュー、2012年12月23日。



写真6 「芸賛道マウル学校」演奏披露コンサート（2012年12月28日、「ふと出会った楽器店」提供）

「ふと出会ったコンサート」は毎週金曜日の夜8時から9時まで、2組のインディーズバンドによって演奏されることが多い。訪れる人は、地域の住民や、講座の受講生、コンサートで演奏する人の家族や知り合いなどであり、新聞記者やドキュメンタリー、映画のプロデューサーが取材で来ることもある⁴⁹。従来のライブクラブには一般的な酒類の提供もなく、なごやかな雰囲気特徴的である。

この「ふと出会ったコンサート」は住民に好評で、ある住民は「最初はこの近所に入って来ると聞いてうるさいのではないかと心配していたが、むしろ通りの雰囲気が華やかになった。私たち住民に無料コンサートを提供してくれることで、文化的な恩恵も受けることができるので、とてもいいことだと思っている」と答える⁵⁰。勇気を出して入り、コンサートを聞いたある高校3年生は、楽器店のA氏に深々とお辞儀してお礼を言いながら帰っていった⁵¹。このように「複合的音楽空間」としての「ふと出会った楽器店」は、町の住民から評価を得ている。

ただ無料コンサートであるがゆえに、基本的に演奏者はボランティアという形で演奏している（1回のコンサートで平均2チームが演奏。1チーム当たり3～5万ウオンの謝礼が演奏者に渡される）。そのため住民の間で親しまれているという側面はあるものの、ミュージシャンの抱える経済的問題を解決の助けにはなっていないのではないかという疑問が生じてくる。

⁴⁹ 同上。

⁵⁰ 前掲「私たちのまち麻浦」9月号、10頁。

⁵¹ 前掲「麻浦トゥデイ」。



写真7 「ふと出会ったコンサート」(2012年12月23日、筆者撮影)

(4) 複合的音楽活動の効果と問題点

このようにこの複合的な音楽活動は、利益をあげることよりも「才能寄付」を軸に据えるがゆえに、音楽の質の向上を願うミュージシャンとしての思いと経済的困難という現実の克服にはつながっているとは言い難いと推測される。そこで以下では、「ウリマウルプロジェクト」からの支援金内訳を見ながら、この点を検証したい。

補助金は437万5千ウォンで、補助金の10%にあたる43万7千500ウォンが自己負担額となっている。

単位：ウォン

予算 科目	補助金			自己負担			執行率	
	予算額 (実行計画)	執行額	執行 残額	予算額 (実行計画)	執行額	執行 残額	補償金	自己 負担
合計	4,375,000	4,375,000	0	437,500	437,500	0	100%	
固定 人件費	1,500,000	1,500,000	0	0	0	0	100%	
人件費	900,000	900,000	0	287,500	287,500	0	100%	100%
広報費	500,000	500,000	0	0	0	0	100%	
事業 進行費	1,475,000	1,475,000	0	150,000	150,000	0	100%	100%
活動費	0	0	0	0	0	0	100%	

表2. 費目別合計(西江洞資料より筆者作成)⁵²

⁵² 前掲「ウリマウルプロジェクト 最終結果報告書 芸賛道コミュニティ」。

自己負担はすべて「ふと出会った楽器店」に関連するもので、ウクレレとアコースティックギター教室の講師料12月分とコンサート支援金に充てられている。

単位：ウォン

日時	予算科目	執行内訳	金額
2012.12.28	人件費	マウル学校ウクレレ講師料12月分	150,000
2012.12.28	人件費	マウル学校アコースティックギター講師料12月分	137,500
2012.12.28	人件費	コンサート支援金	150,000
合 計			437,500

表3. 支出合計表（自己負担）（西江洞資料より筆者作成）⁵³

以下の表は、補助金の支出内訳である。店が負担したウクレレとアコースティックギター教室の講師料12月分以外の講師料は補助金から支出されている。講師料の内訳は10月から12月の間で、アコースティックギター教室が25万ウォン（10月10万ウォン、11月10万ウォン、12月5万ウォン）、ドラム教室が20万ウォン（10月10万ウォン、11月10万ウォン、12月支給無）ウクレレ教室が10万ウォン（10月10万ウォン、11月および12月支給無）である。固定人件費として150万ウォンが支出されているが、この資料からは詳細な用途をうかがうことはできない。

事業進行費からは、昼食会の食事代、材料費そして「ふと出会ったコンサート」の支援金44万5千ウォンが支出されている（支出回数は10月1回、11月6回、12月1回の計8回）。先述したように、1チーム当たり3～5万ウォンの謝礼が支払われているが、「ふと出会ったコンサート」の企画者によれば、事業進行費から支払われた「ふと出会ったコンサート」の支援金は、演奏者への謝金として使われている。以下の表には11月に「ゲスト演奏者支援金」の名目が記載されているが、これを除いては支出されていないようである。コンサートは週に1回開催されるから、平均して1グループに4万ウォンの謝金が支払われたとすれば、3か月間で100万ウォン以上が必要となる。演奏者の側から見ても、交通費を含めての謝金であるから、これが大きな経済的な手助けとなっているとは考えにくい。住民からは好評を得ているコンサートであるが、この内訳からは、ミュージシャンの立場から見たとき、直接的な経済的支援になっているとは考え難いと言わざるを得ないだろう。

⁵³ 同上。

単位：ウォン

日時	予算科目	執行内訳	金額
2012.10.6	事業進行費	マウルの会昼食代	14,000
2012.10.6	事業進行費	グリーン西江フェスティバル才能寄付公演参加 交通費	2,400
2012.10.6	事業進行費	グリーン西江フェスティバル才能寄付公演参加 交通費	2,400
2012.10.8	事業進行費	マウルの会昼食代	24,000
2012.10.8	固定人件費	芸賛道マウル学校固定人件費支給 1 か月分 1 次	300,000
2012.10.10	固定人件費	芸賛道マウル学校固定人件費支給 1 か月分 2 次	200,000
2012.10.12	事業進行費	マウルの会昼食代	34,000
2012.10.22	広報費	芸賛道マウル学校広報用垂れ幕制作	90,000
2012.10.22	広報費	芸賛道マウル学校広報用リーフレット制作	95,700
2012.10.23	事業進行費	マウルの会昼食代	11,000
2012.10.25	広報費	芸賛道マウル学校広報用リーフレット配布	165,000
2012.10.26	事業進行費	マウルの会昼食代	12,000
2012.10.27	事業進行費	芸賛道定期公演「ふと出会ったコンサート」(企 画担当) 支援金	50,000
2012.10.29	事業進行費	芸賛道マウル学校アコースティックギター教室 材料費	60,000
2012.10.31	事業進行費	マウルの会昼食代	38,000
2012.10.31	事業進行費	芸賛道マウル学校 2 講座 (手縫い、ハンドメイ ドアクセサリー) 材料費支援	480,000
2012.11.1	人件費	芸賛道マウル学校ドラム教室 1 0 月講師料	100,000
2012.11.1	人件費	芸賛道マウル学校ウクレレ教室 1 0 月講師料	100,000
2012.11.1	人件費	芸賛道マウル学校アコースティックギター教室 1 0 月講師料	100,000
2012.11.1	事業進行費	マウルの会昼食代	12,000
2012.11.2	事業進行費	芸賛道定期公演「ふと出会ったコンサート」(企 画担当) 支援金	40,000
2012.11.2	事業進行費	芸賛道定期公演「ふと出会ったコンサート」(ゲ スト演奏者) 支援金	20,000
2012.11.7	事業進行費	芸賛道マウル学校追加開設講座公募用垂れ幕制 作	40,000
2012.11.9	事業進行費	芸賛道定期公演「ふと出会ったコンサート」(企 画担当) 支援金	100,000
2012.11.13	事業進行費	マウルの会昼食代	21,000
2012.11.19	固定人件費	芸賛道マウル学校固定人件費支給 1 か月分	500,000

2012.11.19	事業進行費	芸賛道定期公演「ふと出会ったコンサート」(企画担当) 支援金	60,000
2012.11.22	事業進行費	マウルの会昼食代	12,000
2012.11.23	事業進行費	芸賛道定期公演「ふと出会ったコンサート」(企画担当) 支援金	50,000
2012.11.29	事業進行費	芸賛道マウル学校追加開設講座公募用垂れ幕制作	88,000
2012.11.30	人件費	芸賛道マウル学校アコースティックギター教室 1 月講師料	100,000
2012.11.30	人件費	芸賛道マウル学校手縫い教室 1 1 月講師料	150,000
2012.11.30	人件費	芸賛道マウル学校アクセサリ教室 1 1 月講師料	150,000
2012.11.30	人件費	芸賛道マウル学校ドラム教室 1 1 月講師料	100,000
2012.11.30	事業進行費	芸賛道定期公演「ふと出会ったコンサート」(企画担当) 支援金	75,000
2012.12.1	事業進行費	マウルの会昼食代	20,000
2012.12.3	固定人件費	芸賛道マウル学校固定人件費支給 1 か月分	500,000
2012.12.5	事業進行費	芸賛道マウル学校童話口演教室材料購入	19,259
2012.12.5	事業進行費	芸賛道マウル学校童話口演教室材料購入	40,000
2012.12.7	事業進行費	芸賛道定期公演「ふと出会ったコンサート」ポスター制作費用	100,000
2012.12.7	事業進行費	芸賛道マウル学校童話口演教室材料購入	14,400
2012.12.7	事業進行費	芸賛道マウル学校童話口演教室材料購入	33,330
2012.12.7	事業進行費	芸賛道マウル学校童話口演教室材料購入	28,000
2012.12.14	事業進行費	芸賛道定期公演「ふと出会ったコンサート」(企画担当) 支援金	50,000
2012.12.20	事業進行費	芸賛道マウル学校講座 (ハンドメイドアクセサリ材料支援)	73,520
2012.12.20	人件費	芸賛道マウル学校手縫い教室 1 2 月講師料	50,000
2012.12.20	人件費	芸賛道マウル学校アコースティックギター教室 1 2 月講師料	50,000
合 計			4,375,000

表 3. 支出合計表 (補助金) (西江洞資料より筆者作成) ⁵⁴

つぎに「芸賛道」コミュニティの「ウリマウルプロジェクト」最終結果報告書の「本事業の結果および総括評価」を見てみたい。「事業の成果を何だと考えるか」という質問事項に

⁵⁴ 同上。

対し、「西江洞芸賛道マウル学校を通して住民間のコミュニケーションがさらに活発になり、お互いの関係が近くなった。マウル学校を通して生徒たちが実際に役立つことを学び、作品を残すことでマウル学校の機能と成果を確認することができた。芸賛道にあるマウル学校講師の作業室に多くの人たちが訪れることで、広報の効果も見ることができる。何よりも最も重要な成果はマウル住民間の距離が狭まったこと」と寄せる⁵⁵。また参加者は「とても有益で楽しいアコースティックギター教室が低廉な授業料で、体系的に学ぶことができる機会となり、とてもよかったです。これからもマウル学校が続くことを望んでいます」。「よい空間と体系的な進度が気に入りました」と評価している⁵⁶。

「本事業において不足していた部分や惜しかった点は何か」という質問に対しては、「実際の計画上の事業はすべて終わったが、マウル学校の生徒たちの展示会とコンサートが残っているため、まだ分からない。支援金の部分では、講師料をもっと増やすことができたなら、という思いがあった。1万ウォンの非常に少ない受講料と少ない材料費の予算編成では、講師が個人負担しなければならない。今後事業を行う際には、より精密に材料費、講師料を編成することが必要」と答えている⁵⁷。

このように、受講者は安価で質のよい講座が提供される点を評価し、また住民は通りの雰囲気が悪くなった点や無料コンサートが実施されている点など、自分たちの居住地に「芸賛道」が形成されたことを肯定的に受けとめる。しかし芸術家や音楽家にとっては、マウル学校で教えることにやりがいを感じ、また自分の店の存在を知ってもらえる機会になっているものの、経済的な解決にはつながらず、むしろ負担となっている。

4. おわりに

以上、本稿ではソウル特別市の弘大地域にある芸賛道の「ふと出会った楽器店」を事例にその背景と過程を明らかにすることで、この取り組みが抱える問題の所在を浮き彫りにした。「ふと出会った楽器店」は楽器販売から、講座、コンサートまでをトータルに提供する「複合音楽空間」である。これは従来には見られなかった新しい音楽文化活動形態であり、本稿ではこれが、行政からの支援や自治会館講義の限界、そして音楽で生計を立てたいというミュージシャンとしての願いと経済的問題との葛藤を解決する可能性を秘めた新たな音楽活動であるという仮説のもとに、その形成過程や成果を明らかにした。

現在展開されているこの形式は、2000年代後半に登場した「協力型」都市共同体運動の流れに沿うものであり、行政の支援が得られやすい。また地域住民からも好評で、住民が元来抱いていた音楽に対するネガティブなイメージを変えていることで、住民と音楽を提供する店が共存できるスタイルを提示しているとも言える。しかしながら、ミュージシャンの経済的問題は依然として残ったままである。この問題が克服されていないとすれば、このようなプロジェクトにどのような意味を見出すことができるのだろうか。

⁵⁵ 同上。

⁵⁶ 同上。

⁵⁷ 同上。

短期的に見れば行政からの支援は、ミュージシャンの経済的な問題解決の一助となっていない。しかしながら、長期的に見れば以下のような可能性も見出すことができる。つまり、ミュージシャンが持っている才能を寄付するという考えのもと、安価な講座を行うことで音楽を学ぶ敷居が下がり、その機会を享受した生徒側には、公演や曲作成活動の機会が開かれる。それらの機会を利用し、音楽活動を行うことでミュージシャンが養成され、これが繰り返されることで、ミュージシャン数の増大、ひいては音楽市場の拡大、音楽の質の向上までもが期待されることが考えられる。すなわち、音楽活動の全体の活性化にもつながる可能性が秘められているのである。音楽市場そのものが広がれば、音楽に携わる仕事の雇用の増大にも結び付き得るであろう。

本稿の限界は、「ウリマウルプロジェクト」とそれ以前に西江洞住民自治委員会の支援で行われていた講座との間にどのような違いがあったのか、「ウリマウルプロジェクト」で行われるようになって、どのようなメリットもしくはデメリットが生じたのかなどについての考察が不十分であった点であり、この評価はまだ定まっていない。その原因のひとつは、何よりもこの音楽活動と支援が始められて、あまり時間が経過していないことが挙げられる。したがって今後は、この取り組みの成果や問題点、制約要因などをより明らかにすることを課題としたい。

(注) なお本稿は、掲載誌刊行の遅れと、刻々と変化する研究対象の状況に伴い、論文テーマの性格上、最新の資料や情報を補っている。

[Diffusion of Cultural Activity in a Community: Focusing on the Music Activity in the HongDae Vicinity]

[YAMATO, Yumiko・九州大学大学院・比較社会文化学府・国際社会文化専攻・国際関係論]